



ミドリノホシ



千職丈二

第一章「新しい道」

生きとし生けるこの森羅万象の全ての命は自分の生きている意味を持って行動することができなければ、生きる意味なんて存在することはないんだろう。天とか神みたいなそういうものに生きている意味というものは与えられたものじゃないんだろう、と思っているということである。まあ、この巨大で美しい森を見ていると、そんな自分一人の生きている意味なんて小さなことはどうでも良いんじゃないだろうか、とってしまうんだけど。

道に迷ってからもう一時間は経っているんだろう。だからと言って、別に体のどこかが重くなってきたとか、喉が渴いてもう歩くのも嫌になってきたという訳じゃないんだけど、次に大きな町に着いた時には、やはり方位磁針と地図くらいは買っておくべきだろうと心の底から思っている。

しかし、宛てのない旅というものは性に合っているみたいで、良いもんだと思っている。まだ二日目だというのに、いや、まだ二日しか経っていないからなんだろうか……？ とても心が踊り、他人から見ても三日前の自分とは目の輝きが全然違っているんだろう。

ただ、なんでこんなことを考えているんだろう。なんだかんだ言っても、一人旅は寂しいと俺のガラスのハートが訴えているんだろうか……。まだまだ若造なのかもしれないな。まあ、それはエルフの中でということだけど。ゴブリンとか恐竜人にだけは老けているとは言われたくないんだよな……。あいつらがガキすぎるっていう話だ。

まあ、そんなことはどうでも良い。

重要なのは——つまり、今、俺は道に迷っているということだ！

どう見ても周りにある木々は新しく、そろそろ森を抜けるということは間違いないんだろう。でも、エルフの治めている万古の森としてはいささか若すぎる気がする。村にあった地図にない新しい森ということなんだろうか。

「あの地図、いつ作られたものだったんだろう……」

確かめなかったことを悔やむ感情が湧いてきて、それが独り言になった。まるで老人か。いや、まあ、独り言を言うのは老人だけじゃないんだろうけど。でも、俺はエルフ史上が始まってからの天才である。だと思っている。……間違いない。そうに違いない。うむ、天才の記憶力を舐めてもらっちゃ困るぜ、神様……！ 確か森を抜けてすぐの辺りは草原の広がっている平地だったはずである。そこには今の目的地であるエルフの町で唯一森にない町、緑平町があるはずなのだ。そしてさっきの分かれ道で、南西に伸びている道を選んだ。つまり、あのだだっ広い平原だったところが、今となっては森になっているということなんだろう。うむ、森を抜けた後はそれに沿って北へと向かわないといけならしい。

あんまり上手くいくと面白くないもんな。ああ、なんて若々しい考え方なんだろう……。こんなにヤングな俺っちを老人よばわりするなんて、同種族のやつらはわかっていないさー！

もしかしたら、今頃、驚いて搜索願が出ているんじゃないだろうか。軍隊まで動員していたらどうしような……そこまではしないだろうと思っているんだけど、わからないよな……。

「ん？」

ちよっと（かなりか？）くだらないことを考えていると、小さな谷、そして中心には小川のあ

る場所へと辿り着いた。十メートルはあるだろうか。ゴツゴツとした岩でできている面なので、滑る可能性はもちろんあるだろうけど、降りられないこともないだろう。さらに幸いなことに、下は草むらになっている。小川の向こうにある二十メートルくらいの少し大きな木に小屋が乗っかっている。だいぶ下の方だ。

小川の周りの草むらには獣が通ったような道筋がある。きっとあそこの小屋の主が通ったあとなんだろう。小川には丸太による簡単な橋も架けられている。

「……寄ってみるか」

こんな所にどんなやつが住んでいるのか興味が湧いてきた。確かにこの辺りは獰猛な獣も少ないだろうし、身を隠すには持って来いなのもかもしれない場所なのである。

「エルフの貴族の別荘か？ もしくは大魔法使いとか、仙人、だっけ？ そういうやつらでも住んでいるんだろうか」

ちなみに俺は大魔法使いじゃない。いつでも呪文が唱えられるように、と、口を慣らす為にも、ぶつぶつ、と呟いた。

小屋に着くと、ノックをする。近づいて見ると結構よく出来ている。ただのボロ小屋だったら勝手に入っているところだったけど、ここまでの作りになると誰かが住んでいると思うのが普通だろう。不法侵入をしようとは思わない。

そこまで疲れている訳じゃないんだけど、息抜きが出来るならそれに越したことはない。エルフは基本的に同種族には情がある方だから、頼み込めばお茶くらいは出してくれるだろう。

——考えが甘かった。

一瞬でそう悟った。

殺気だ。しかも赤い魔力を纏っている強烈なもの。

右半身を後ろへ移動させて、右手で腰に付けた（背中とも言えるかもしれないけど）短剣の柄を持ち、左手を前に出した姿勢で後方へ大きく飛んだ。三メートルはあるだろうけど、この俺にとってはなんてことはない。

どうやら蹴破ったみたいである。ドアを開けてからの突進じゃなく、ドアをこっちに当てるだけの威嚇じゃないところから、相手が本気で戦う意志がある、そして悪いことに戦い慣れている可能性もある。頑丈そうなドアだったから、腕っ節だけでも相当なもんなんだろう。

小屋から大きく飛び、小川の周りにある狭い草原に着地する。それと同時に小さな陰が、大きな刃物……あれは多分、斧、を振りかざして飛び降りてくる。

動きでわかる。あれは直に受けると危険である。思ったよりも相手が小さいことに安心したけど、その事実がそこまで意味のないことであるということを理解している。

小さな背丈に有り余るパワーを持っている、赤き上位種族、ゴブリンだ。

どうしてこんなところにゴブリンがいるんだろう？ いや、まあ、それは後回しだ。

そいつはこっちを見ようともせず、全身を使って斧を振りおろしてきた。

速い。けど、俺の方が速いか。

一歩だけ後ろへと下がり、スレスレのところで避ける。そして右手で剣を抜くように見せて、

大きく右肩を動かす。それはフェイクで、左のストレートを思い切り撃つ。

ゴブリンは一度後ろへと体重移動したけど、フェイントに気づいて前へ踏み込んで来た。

「なっ！」

この至近距離で、ストレートを避けながらその丈の斧を……！ 相手の身長を考慮できなかった。

声を出した俺は左ストレートを放ちながら後ろへと下がり、右手の剣を居合抜きして斧に側面から打撃を加える。

このチビは軽い方じゃなかったけど、こちとらエルフの戦士だ。小さな体は草むらを転がった。

「だっ！」

ゴブリンにしては可愛い声で、そいつは叫んだ。こっちが予測できたように、あつちはこの華奢な体から、ここまでのパワーが出るなんて思わなかったのかもしれない。すぐに斧を持ったまま起きようとしているけど、伸び切っている状態の両腕を思いっきり蹴飛ばす。蹴りは肘辺りに入った。握力を失った両手から、斧は四、五メートルほど飛んでいった。

マウントポジションを得る。そして、失敗こそしたけど、俺を殺そうと言わんばかりに斬りかかってきたやつの顔を拝む。……えっ？ ええええっ……！？

……驚かすのは登場だけにしてくれ。そう俺に思わせた斧チビの顔はよく見るとゴブリンのものじゃなかった。さらにこの辺りに住んでいるものが多いエルフでもなかった。

「お前は……！ ハーフか……？」

そう、ゴブリン、そしてエルフじゃないという形容は間違っているんだろう。ゴブリンであり、そしてエルフであるのである。

ゴブリンのように低くて大きな鼻をしているけど、瞳はエルフのように澄んでいて、さっきは確かに赤い魔力を感じたんだけど、戦闘意欲を喪失したんだろうか。今は俺と同じ色の大きな緑色の魔力を感じている。とても小柄だというのに……。

しかし――

「ぶっ、ふふっ……お前、可愛い顔しているなあ」

どう見ても成熟した戦士には見えないこの風貌は何かのマスコットにしても良いんじゃないかというくらいのものである。ブサ可愛いとでも言えば良いんだろうか。

あ、いけない、これは怒られてもしょうがないことを言ったぞ。

「……そうなの？ 母さんは確かに可愛いって言っていたけど」

ちょっとビビっていたけど、そういったリアクションは取らなかった。良かった。また一悶着になったら嫌だしな。

純粹そんな瞳で真っ直ぐにこっちを見てくる。

「……まあ、可愛いんじゃないかな。エルフのお姉さんには評判が良いと思うぜ」

ここは一応、褒めておくべきだろう。心にもないことを言っているつもりはないんだけど。

「そうなんだ……ふーん」

「あれ、興味ないのか？」

男で間違いのないと思ったんだけど。

「うん」

全然飾り気のない会話をしているけど、いや、だからこそ、こいつは悪人じゃないんだろうということが分かる。

敵意が消えたか、もう反撃されることはないのか、わからないけど、とりあえずマウントポジションから立ち上がり、服の汚れを払う。

黄緑色をした長袖長ズボンの服の汚れを気にすることもなく、ハーフ君は何を考えているのかよくわからない表情で立ち上がった。

とりあえず、どうして俺を襲ってきたのか聞いておくべきだろう。

「なあ、なんでいきなり襲ってきたんだ？」

「えっと……母さんがゴブリンは全力で追い払いなさいって……」

「……おいおい、俺はゴブリンじゃないぞ」

「え……？ 違うの？」

「あー、そうだな。会ったことがなければ確かにわからないかもしれないな」

「強い人はゴブリンだと思っていた……」

「ちなみに俺はゴブリンより強い。まあ、ゴブリンはエルフより乱暴だし、体は頑丈かもしれないけどな」

「強くて怖い人がゴブリンとは限らないんだ……」

ここに来たのが普通のエルフじゃなくて良かったわ。

「あのな、お前は多分、かなり強いから、これからは気をつけてくれ」

「うん」

真剣に普通の子どもと話しているみたいな雰囲気だけど、そういうことにはならないんだよな……。こんなところに住んでいるのはそういうことだったのか。一つはとても簡単な理由である。ゴブリン、恐竜人、エルフなど上位種族の、違う種族同士の交配はとても危険であると確認されている。

九十九パーセントの確率で、奇形児よりももっと悲惨な、化け物を生み出してしまうからである。この子は容姿的には、まあ、例外な方だろうけど、内に恐ろしいものが眠っていることは間違いないだろう。国家機関に知られたら、ほぼ間違いなく処刑、もしくは一生を牢獄で過ごすか、あるいは兵器となるしかない。

ま、その辺りは置いておくか。

「なあ、今日は家に泊めてもらえると有り難いんだけど、無理か……？」

「え……？ 良いけど。兄ちゃんもゴブリンじゃないんだよね？」

どのくらい危険なのかまだわからないけど、俺の方が強いから大丈夫だろう。

第二章「人間」

まずは世間話をしようと思ったんだけど、どうやらこいつは全然と言って良いほど世間のことを知らないみたいだった。二日前までの情報しか知らない俺よりも世界情勢に対して疎い。そうなるなら自然と身の上話になるんだけど、それにまた驚かされる。ギャグ漫画じゃないけど、目が飛び出るんじゃないだろうかと思ってしまった。

どうやら三年前に母親は死んでしまったらしい。しかも、父親のことは全く知らないと言うのである。そしてこんな誰もいないようなところで三年間も一人で暮らしていたのである。……まあ、何よりも、自分が世の中の敵とされているということを知らなかったのである。

「つまりな、上位種族のハーフは一個体として強い上に、犯罪者が多くて、どの国もその対応に四苦八苦しているんだよ」

「ふーん……じゃあ俺も強いのかな」

「まあ、俺の方が強いだろうけど、一般的に言えば強い方だろう」

「そうなのかな……そんなことよりも、見つかったらどうなっちゃうの？」

「うーん、この国なら命に関わることはないと思う」

「軍隊に入るの？」

「そうなるだろうなあ……でも、年齢制限に引っ掛かるかもしれない。まあ、ゴブリンキングダムで発見されても同じだろう。他の国だと危ないけどな……」

「酷いや」

「そうだなあ。お母さんはそれを知っていたから、ゴブリンは追い返せと言ったのかもしれないなあ」

いや、自分で言ってみて気づいたけど、それだけなら、この子の母親は最後の最後である遺言で、ゴブリンが来たら絶対に追い返せ、なんて言うだろうか。この辺りはわりと海も近いし、魚人が来たら追い返せ、と言うならなんの違和感もなく納得できる。ゴブリンと魚人は破滅的に仲が悪いというのが世界の常識である。でも、ゴブリンやエルフならむしろ保護してもらえるはずだろうに……戦闘要員にされることは間違いないだろうけど……？ この子は先天的にかなりの戦闘力がありそうだから、さほど心配する必要もないと思うんだけど……心配性だったのかな。

あれこれ考えているとラフレスが話しかけてきた。

「ねえ、兄ちゃんの名前、忘れちゃった。なんだったっけ？ もう一回教えて！」

「グリーン・ライトだ。別に明日になったらすぐいなくなるんだから、覚えなくても良いだろ」

「……うん、そうだけど」

俯きがちに呟いた。喜怒哀楽は激しそうで、感情は表に出やすいタイプなんだろう。もし人間だったら、赤の魔力を持っている典型的な特徴である。でも、この子は緑の魔力を持つことになるおっとりとしている特徴の方が強いかな……。

「……やっぱり寂しいか？」

「……うん」

それでいて素直だ。生まれはどうあれ、精神的には何の変哲もない歳相応の子なのだ。ここで

他の誰かに見つかるくらいなら、俺と一緒に旅をした方が良いのかもしれない。でも、他国の捜査機関に見つかるのはまずいか……やはり国に保護の要請をするべきだろうか。

「ま、なんて言われても、旅には連れていかないけどな」

「えー……」

テーブルの上に置かれた元々は女性用だと思われる気持ち小さなカップを手に取り、お茶を飲む。少し癖が強い風味だ。どんな葉だったんだろう。入れ方の問題なんだろうか。まあ、なんでもいいな。入れたのは俺なんだし。

ラフレスは不満そうにこっちを見つめている。

「お母さんはここで静かに暮せって言ったんだろう？」

「うん……」

「じゃあ、お前はそのお母さんとの約束を破っちまっても良いのか？」

「うー……」

とても難しそうなことを考えているという顔をしている。きっと葛藤しているんだ。面白いやつだなあ……。

それにしても、やっぱり着いてきたがったか。どうもお兄ちゃん体質みたいで、小さい子どもの面倒は昔からよく見ていたなあ……言うことを聞くやつの気がしれないと思っていたなあ……そんなに面白いことなんてできないというのに。

「まあ、今日は遅いからもう寝よう。しばらくここで遊んでやっても良いしな」

色々なことを話しているうちに、いつの間にか太陽は西へと沈んでおり、黒い魔力が肥大しそうなとても綺麗な月が空を支配している。

今宵は満月である。恐怖と哀愁が漂ってくる静かで澄んだ空気が、窓から熱を奪うように入ってくる。

「うん！　じゃあ、しばらくここにいてよ！　絶対だよ！　それじゃあおやすみ！」

そう言うと、ラフレスは一つ奥の部屋へと入って行った。俺はこの部屋のソファで眠ることにした。どこで寝るかと言われた時、ラフレスの母ちゃんのベッドを使っても良いと言われたんだけど、なんとなく悪い気がしたから、ここで寝ることにしたのである。

季節は秋である。若干熱いくらいだから、どうってことはない。

*

深々と夜。真実多く。

エルフの青年はちょっとした反抗心から旅に出た。そのような彼の旅はゴブリンとエルフのハーフ、ラフレス、という世界の敵と出会うことによって、世界の裏側の中心へと流されていくことになる。

少年の過去。

禁忌の理由。

王者の証。

種族対立。

世界大戦。

人間がこの世界で引き金を引いてしまうことは必然なのかもしれない。

創造主がいるのなら、何を思ってこの世界を作りあげたのだろうか。

緑の星は今、何を思っているのだろうか。

誰も知らないだろうし、知る必要さえないのかもしれない。

きっとこのような小さな物語と比べると、規模が違いすぎるのだろう。

教えてくれるのであれば、教えて欲しいものである。

今、この新しい森には一人の魔術師がいる。魔術師と総称されるのは魔術を使うことができる人間のことである。他の上位種族で魔術、いや、彼らが使う魔術は魔法と呼ばれ、同様に魔法使いと呼ばれている。

彼は世界クラスの指名手配犯で、賞金首である。魔術師でもある大泥棒だ。

引き金は引かれた。

*

「ん……？」

物音がしている。青い魔力を微かに感じるんだけど、魚人や人魚などの特有の空気中の湿度の上昇している感覚はない。そういうことなら、今、ここに忍び込んでいるのは人間に違いない。

俺がいたのが運の尽きだな。ラフレスだけなら仕留めるのはそう難しくないだろうけど、この天才エルフ様にかかればコソ泥なんてお茶の子さいさいだ。

足音はないけど、気配は消えていない。暗殺者や上級武芸者の十八番である気配遮断が使えていないということは魔術で足音を消しているのだろう。

相手は魔術師の可能性が高い。

この国は他国よりも住んでいる人間は多い方である。人間絶対主義国のローア帝国と、ジパンを除いて、だけど。まあ、珍しい方じゃない。

でも、彼らはエルフよりも犯罪率が高くて、厄介者である人間はこの国から追い出すべきであると主張する者も多い。

特にそういう偏見はなかったんだけど、こうやって一例に遭ってしまうと、見損なってしまうよなあ……。

ラフレスの部屋には行かせない。ここでくたばれ。

ソファーに立ててあった短剣を静かに抜く。

向かいの部屋のカーテンは開いている。今日は満月である。月明かりが廊下を鮮明に照らす。気配が近づいてくる。

息を殺し、飛びかかるタイミングを待つ。

あと三步、二歩、一一、一步。

今だ！

気配を消したまま部屋の前を通り過ぎようとしていた外套を纏った男の首に、後ろから短剣を回す。

いきなり殺したりしない。命は命なんだ。基本的に生け捕りにすべきだろう。

「……一撃で俺を殺しておくべきだったな。死ぬかもしれないと思ったのは久しぶりだったが、絶対に後悔するぜ」

「それはどうかな……？」

「ふはは、面白い。それにしても、バリヤが反応しないってどういうことだ。何者か聞いてやる」

「エルフの戦士」

「気配を消すなんて、今時のてだれでもできるやつは珍しい」

……先ほどまでは魔力や気配を抑えていたようだけど、じわじわとそれをやめてプレッシャーをかけてきやがった。信じられないスペックだ。それだけじゃない気がする。こいつの余裕はまだ何かあるんじゃないだろうか……。

「……っ、随分と余裕があるな」

「まあな」

会話から相手の弱点を引き出すのは難しいか……？

この人間は世界でも屈指の量の魔力を持っているだろう。魔力は言いかえれば体力であり、多ければ多いほど純粋に生命力があると言っても良いだろう。

魔法があまり得意じゃない俺でも纏っているものである。魔法が使えなくても、生き物なら持っているものなのである。この星という存在自体がマナと言われる巨大なエネルギーを持っているなんて説もある。その辺りまで詳しくはわからないけど――

とにかく、量が膨大だ。俺とほぼ互角……間違いない。信じられないほど――強い！

しかも、こいつの魔力の色は遠くから感じる分には青だったけど、五大色素である。魔力、そして魔法は五つの種類に分類されている。赤、青、黒、白、緑だ。きっと得意な魔術が青というところなんだろう。

――規格外だ。

これだけでも十分なほど厄介だというのに、青魔術が得意ということは外的要因から身を守ることを得意としているということだ。その中でも忌み嫌われている魔術、対抗魔術は身を守るだけでなく、魔術や魔法そのものを打ち消すなんてこともやってくれる訳だ。他の魔術や魔法しか使えないものたちからは非常に忌み嫌われている。

俺も簡単な魔法を使うことができるけど、呪文の詠唱が必要というレベルである。相手は大魔法使い級の魔術師である。気を抜くことはできない。

さあ、これからどんな魔術を使ってくる？ 水のバリヤか？ 俺を凍らせるか？

そんな考察をしていると、男の外套が青い閃光を放った。

「しまった――魔法道具か！」

視覚を殺された。その上で、幻覚を見せる効力があるみたいだけど、そこまでは通じない。

魔法道具とは科学じゃ捉えられない現象を起こす、またはそれらによって作られた道具のことである。強力なものは使い手の魔力を消費することなく魔法と同等の効力を発揮することができる。

でも、魔術師が持っているのは珍しい。人間？――泥棒――魔術――魔法道具――

「あんたはもしかして……！」

ある人物が頭に浮かぶ。

くそっ、奥まで行っちゃったか……？

「悪いな、用事はもう済んだから、しばらくここで寝ていてくれ」

頭部に強烈な痛みが襲って、気を失った。

第三章「烈火の心」

鳥の囀りが聞こえてくる。この辺りにいる鳥も可愛い声で鳴くものである。朝の空気は次第に冷えきており、少しずつ冬の気配を忍ばせている。

まだこれくらいの冷気は心地いいと言っても良いだろう。体から余分な熱を持って行ってくれているようである。

しかし、体は異常なほどの熱を持っているみたいで、なかなか冷えてくれない。それどころか色々なところが痛くて重く、一言で言ってしまえば、だるい……。

「うううう……」

うめき声を上げる。確か昨日はラフレスの母ちゃんのベッドで寝ることを断って、ソファで寝たような気がするんだけど、こんなに固くはなかったような……？ しかもいつの間にかうつ伏せになっていて、頬と体の下敷きになっていた左腕が痛くてしょうがない。どうでも良いけど、めやにも凄いことになっているな……。

これはラフレスに挨拶をする前に顔を洗うべきなんじゃないだろうか。……ああ。腕が痛い。そろそろ起きないと千切れるかも。

右腕を使って体を起こすと、そこは廊下だった。

*

「えええええ！」

「すまない、俺、あんまり強くないかも……」

「でも、昨日、家に入った泥棒も凄く強かったんでしょ……？」

「ああ、間違いない。あれには敵わない。本当に最初の一撃で仕留めれば良かった。くそっ……」

椅子に座ったまま、小さくなっていく気分だ。

ラフレスを起こして食事を摂った後、昨日あった出来事を鮮明に話した。

どうして後回しにしたのかというと、廊下で目を覚ましてすぐにラフレスの安否を確認したんだけど、特に問題がなさそうで、気持ちよさそうな寝息を立てていたし、次に全ての部屋を見回ったんだけど、荒らされた形跡はわからず、何が取られたのか判別がつかなかったのである。もしかしたら、と思ったということもある。こんな小さな家に目当てのものがいないという可能性は高い。俺と同じように興味本位で侵入してきただけなのかもしれない。

——まあ、なんとなく嫌な予感がするんだけど……

「それより、何か取られたものはないか？ 相手は魔術師だったから、物質的なものだけとは限らずに……」

そうは言ったものの、二人とも魔力などに変化はないだろう。誤差の範囲だと言って良い。ラフレスも結構な魔力を持っているけど、俺とあいつには敵わないな……。

ラフレスは上を向いて自分の体を調べている。ちょっと滑稽だ。

首元に手をあてて目を見開いた。

あ、その辺りにないものと言えよ……。

「母さんの形見のペンダントがない！」

……やっぱりそういう大事なものを盗っていったか。

代用の効く家具とかそのうち元に戻る魔力なんかを持っていけば良いものを、流石は大泥棒というだけのことはある。きっと形見という理由以外でも貴重なものだったんだろう。

ラフレスは凄いスピードで自分の部屋へと走っていった。

「ない……ない……！ 本当に？ ない！」

ガタンガタンとダンスを開ける音や、大きな叫び声が聞こえてくる。

……あの時、殺しておくべきだった。やろうと思えばやれたはずだ。まだまだ俺は甘いのかもしれない……。くそっ、これでもエルフで一、二を争うほど強いんだぞ！

ラフレスが部屋から出てきた。真正面からとても激しい真っ赤な魔力を感じる。これは昨日よりも——

新緑のような爽やかな印象だったラフレスの魔力は燃え盛る灼熱の炎のようなものへと変わっている。

俺の前に立ち、俯いたまま、顔を上げようとしない。

「ラフレス」

「……」

「とても大事なものなんだな」

「……うん」

ハッキリしているのはあまり勝ち目がないということだ。

「死ぬかもしれないぞ。それでも良いって言うなら――」

ラフレスは顔を上げた。

「取り返しに行く！ グリーン兄ちゃんも手伝って！」

その目からは子ども扱いなんてすることの出来ない迫力と意志の強さを感じる。激しい怒りが灯っている。

俺でさえ身震いしそうだ。二人なら、なんとかなるかもしれない。

*

新しい森を二人で歩いて行く。周りにある木々は進むほど若くなってきて、もう少しで草原に出るのだと実感する。しかし、ここは世界で最古の森である。若い木と言っても相当な背丈となっている。五十メートルはあるだろう。

足を止めて、ラフレスに最終確認をする。

「ラフレス、今から色々なことを確認するけど、良いか？」

「うん」

「まずお前はそんなに弱くない。いや、むしろ強い。いけると自分で思ったら好きなように捕まえに行って良い。相手は世界クラスの指名手配犯だから、殺しても問題はない」

「うん」

「しかし、まず注意しないとイケないのは相手の魔術と魔法道具だ。お前がどれくらいの攻撃のバリエーションを持っているのかわからないけど、相手は無限に近いはずだ」

「無限……」

「それだけならまだ良い。あいつがなんて二つ名で呼ばれているのか知らないだろう？」

「……うん」

「通称、時間強盗だ」

「時間……強盗……？」

「ああ。この世には超能力とやらが存在しているんだ。あいつは自分の意思のみで、ほぼ無制限に時間を止めるという能力を持っているんだ」

「えっ？」

一瞬だけラフレスから怒りの表情が消えて、驚愕した。

「だからこれはな、最終確認だ。今ならまだやめることができる。俺たちはこの世界で相当強い方だろうけど、それでも、相手はさらに上をいっているだろう。やめるなら、今のうちにやめておいた方が良い。むこうだって生ぬるい真似はしないだろう」

「……やるよ！ 母さんのペンダントを取り返す！」

「オーライ！ 良い返事だ！ じゃあ、これから話すのは作戦の確認なんだけど、まず、時間強盗は魔法道具を沢山仕込んでいるだろうから、あまり近づきすぎるのは危険だ」

「うん」

「でも、俺たちは基本的に接近戦しかできないから、近づかないとどうにもならない」

「うん、それで、さっき言っていた……」

「そういうことだ。けど、あいつは青魔術も使うことができるから、あいつが防御に回るくらいの攻撃をなんとか繰り出す」

「気合だね……！」

「そういうことになるな。矛盾しているけど」

でも、それが一番勝率は高いんだろう。今はラフレスのポテンシャルに賭けるしかない。

「このちよっとの矢で離れて攻撃する。お前は囷だ」

俺の装備は弓矢に短剣、防具は固い木でできている胸当てをしているだけだ。

ラフレスは自分の背丈ほどある斧を持っている。防具と呼べるものは特にない。何かないのかと聞いたんだけど、何もないとのことだ。敵の武装に比べれば随分と貧弱なんだろう。けど、これで臨むしかない。

「うん」

矢は五本であり、すぐに接近戦になるだろう。

「危険だと思ったらすぐに逃げてもいいからな」

「うん」

しかし、この赤い魔力を肌で感じていると、こいつが負けるなんて考えられない。

「あいつはまだこっちに気づいていない。魔力や足跡の痕跡は消してあるから、自分が追われることがないと思っているはずだ」

近くの木の下に手を当てて目を閉じる。体内に神経を集中させて心を研ぎ澄まし、魂の扉を開く。

あっち。あっち。

この新しい森が敵の居場所を教えてくれる。距離はここから二百メートルくらいだ。走ればすぐに追いつくぞ。

「よし、もう一走りで追いつく」

さっきも見せたんだけど、ラフレスは改めて感心していた。

「グリーンってなんでも出来るんだね！」

「いや、なんでもはできないけど、まあ、これはエルフなら、木を大切にすることができれば誰でもできる」

「俺も？」

「うーん、まあ、生きて戻ったらそのうち見てやる。突撃するぞ？ 覚悟は良いか？」

「うん」

「いくぞ！」

*

走る。木々が猛スピードで流れていく。結構な速さで走っているのに、ラフレスはしっかりとついてくる。体はまだ完成していないだろうというのに、身体能力は俺の少し下くらいだろう。恐ろしいポテンシャルだ。

時間強盗を肉眼で確認すると、木の枝に登った。そして弓を構える。

やつはラフレスの接近に気づいた。気配遮断なんてこれっぽっちも考えやしない、怒涛の勢いでの突撃だ。気づかない方がおかしいだろう。

「ちっ、そんな馬鹿な.....足跡までつけないように低く飛んで来たんだぞ.....」

振り返って、やつは魔力を開放した。青い閃光と共に轟音がここまで届く。ラフレスの怒気が伝わったんだろう。相手から手加減する気配は全くない――

しかし、それに臆することなくラフレスは力強く踏み込み、怪獣類を思わせる柔軟で大きな動きを見せる。小さな体でも相当な攻撃力があるだろう。振りには大きい素早い斧の打撃が時間強盗に襲いかかる――

「まずいな.....」

時間強盗の外套がぐるりと円形になって包みこみ、斧の打撃を受け止めた。外套には傷一つついていない。

「なんて馬鹿力だ、こいつ.....」

ラフレスはお構いなしに二撃目を叩き込もうとする。

時間強盗は外套に包まれたまま空中へと飛び上がった。

その結果、ラフレスは空振りする。そして木々が薙ぎ倒された。信じられない.....！俺と変わらないくらい
の力.....！

「一撃目は手加減してくれたのか？」

「そんなつもりはないっ！ 母さんのペンダントを返せっ！」

「そうか、じゃあ、戦闘経験が少ないせいでムラがあるということだな」

どうやら見抜かれてしまったみたいだ。この距離でもなんとか聞き取れる。

「一応、知らないなら教えてやるけど、お前、俺が誰だか知っているのか？」

「時間強盗だろ！ 悪いやつだ！」

「ご名答。そこまでわかっているというのなら、容赦しないぜ。ゴブリンとエルフのハーフ君」

一瞬でラフレスがボロボロになって、地面へと叩きつけられた。

「ぐっ.....はっ.....」

とても苦しそうだ。

――時間が止まっていたのか！

これ以上は危険だ。矢を放つ。

先ほどの外套が反応し、弾いた。

「やっぱり昨日のエルフもいやがったか.....」

外套が元に戻る瞬間を狙ってもう一本矢を放っていたんだけど、それは近代兵器であるバリヤによって弾かれた。

「こんな蠅が止まったような攻撃に、魔法道具を使う必要はないんだよな」

「よそ見するなああああ！」

ラフレスが死に体でまた斧を振る。木々は倒れるけど、時間強盗はまた空へと舞い上がった。

格が違う.....！

矢での攻撃を諦めて、ラフレスへと走って近づいていく。このままじゃラフレスは殺されちゃう.....！

「もうちょっと頭を冷やしたらどうだ.....？」

時間強盗はラフレスへ右手を向けた。大気の水分がラフレスへと集まっていくのがわかる。

「ラフレス、飛べっ！ ファーストプロテイン！」

呪文を詠唱し、氷結の魔術に割り込んで、奇跡を起こす。

ラフレスは一瞬だけ猛スピードで飛び上がった。足元には氷の塊が出来ている。そして、近づいた時間強盗へと斧を振る――

「緑魔法か」

また外套に弾かれてしまう。くそっ、肉体を活性化しても駄目か！

「しつこいぞ……！」

ラフレスは急に空中でバランスを失った。あれは精神に攻撃をしかける黒魔術のせいだろう。

本当に死ぬ！

「リカバリー！」

ラフレスをなんとか抱える。目を覚まして、腕から降りた。

「グリーン兄ちゃん……」

「酷い悪夢でも見たんだろう。気にするな」

しかし、ここでまた時間でも止められたら、確実に死ぬ。

「……なあ、二人にとっても良い話があるんだけど」

何のつもりだ……？

「ほら、昨日のペンダントを返す」

そう言って、ラフレスにペンダントを投げた。

「……本物か？」

「お母さんのだ……！」

どうやら本物みたいだ。

「だからさ、見逃してくれないか？ 二人とも意外と強くて、一瞬だけ本気の魔力を開放しちまったからさ、そのうち追っ手が来るんだ……」

咄嗟に口が滑る。

「おいおい、俺はてめえを取っ捕まえて、億万長者になる気まんまんなんだぜ」

「交渉は決裂か……しょうがないわな……しょうがねえ」

俺たちを含めた辺り一面が凍りついた。

やられた……！ 信じられない魔術の工程の速さ。この規模をノーリアクションで行うなんて、化け物なんてレベルじゃねえ……！

くそっ、どれだけ必死に考えても、この状況を打破する策は出てこない。ここは諦めるしかないか……。ラフレスのペンダントは戻ってきたんだ。むかつくことこの上ないけど――

ふ、と気がついた。

隣から巨大な熱量を感じる。これは赤い魔力とかいうものじゃない。本物の炎の熱気だ。ラフレスの魔力はずっと真っ赤に染まっていたけど、まさか発火するなんて――

ラフレスは少しずつ歩いて前に出る。

バチバチと火花を散らしながら赤く輝き、体と炎が同化している。

これはゴブリンの王だけに許されると言われている固有魔法じゃないのか？

――肉体発火。

「お前っ、まさかっ！」

流石の時間強盗も驚愕している。

「グリーン兄ちゃんを元に戻せっ！」

だっ、と氷の世界で一人踏み込んだけど、

「悪いけど、本当にこれ以上は付き合えない」

どうやら時間を止められてしまったらしく、斧が空を振り抜いた時には、もう時間強盗はどこにも見当たらなかった。

第四章「旅路」

新しい森を抜けると、そこには見慣れない草原が広がっていた。

「わー、凄い！」

「本当にスゲーな」

草原は広いし、世界も広い。

「しかし、本当に悪かったな。ごめん、ラフレス」

「いや、良いんだ。だってそのお陰でグリーンと一緒に旅が出来るんだし」

渡されたペンダントはやはり偽物だった。そっくりなものだったけど、中に母ちゃんの写真が入っていなかったらしい。

「さて、旅に目的が出来たことは良いことなんだけど、相手は手ごわいぞー」

両腕をあげて襲いかかるようなポーズを取る。

「あ、そういえばグリーン！」

「ん？ 何だ？」

無視か。

「どうして旅をしていたの？」

「……大人の事情だっ」

横を向いて答える。

「何それ……」

良い歳になって、ちょっとした反抗だとは言えない。

「ところで、ラフレス、体に異常はないのか？」

「え？ 全然ないよ！ むしろ調子が良くなったみたい！」

魔力も初めて会った時と比べると気持ち増えている。

もしかしてあのペンダントは――